

岡山県南部地域の道通信仰について

平田 満里子

(手塚 恵子ゼミ)

目次

はじめに

第1章 概要・先行研究

1、岡山県岡山市沖元地域の道通信仰

- (1) 地域の特徴
- (2) 沖田神社道通宮
- (3) 清水家の屋敷神
- (4) 周辺住民の道通信仰

2、岡山県笠岡市地域の道通信仰

- (1) 地域の特徴
- (2) 道通神社
- (3) T家の屋敷神
- (4) 周辺住民の道通信仰

第2章 現地調査

- 1、沖田神社の宮司への聞き書き
- 2、道通神社宮司への聞き書き

第3章 考察

- 1、沖田神社道通宮の考察
- 2、道通神社の考察
- 3、まとめ

おわりに

はじめに

道通信仰とは、岡山県南部地域を中心に広まった「祈願神」への信仰である。その信仰においての神は「道通様」「道通さん」などと呼ばれ、蛇の「オツカイシメ⁽¹⁾」がいると言われている。信仰者は岡山県下にとどまらず、中四国・京阪神から熱心に参る信者が現在もいる。

神社として「道通」の名前を持つのは、岡山県岡山市の沖元という地域に建つ沖田神社道通宮、岡山県笠岡市の横島に建つ道通神社の2社である。どちらも主祭神は猿田彦だ。

「祈願神」は願いを叶える神様とされることが

多いが、その祈願の大部分は「他者を崇ってほしい」「人から崇られたからお祓いしてほしい」といった、祟り神の面としての道通様への信仰からなる。この祟り神的な信仰の場合は、蛇のオツカイシメを使わして人を崇ると言われる事例が多い。

現在、昭和の頃よりは「祈願神」に対する信仰度は下がっているが、今も祟りや呪いに関する御祈祷を目的に上記2社の神社へ赴く人も少なくない。

また家の敷地内に社を建て、道通様を祀る風習もあり、そこでも主祭神は猿田彦だとされている。特に岡山市沖元の清水家の邸内の道通宮は、道通信仰に大きな影響を与えた。第3章にて詳しく説明するが、このような個人宅の敷地内に社やお宮を建てて信仰される神を屋敷神という。

以上のことを踏まえると、道通様は4つの面を持つ神であると言える。

- 1、願いを叶える「祈願神」
- 2、蛇のお使いを持つ神
- 3、他者を崇る激しい神
- 4、屋敷神的な面を持つ神

私は、屋敷神的な面の道通信仰に焦点を当てて考察することと、現在の道通信仰はどのように行われているのか調査することを卒業研究の課題とした。

現在の信仰の様子を知るために、沖田神社道通宮および道通神社の2社を対象にフィールドワークを行った。フィールドワークでは2社の宮司達に聞き書き調査を実施し、その結果を第2章にまとめた。

そして第3章では、先行研究とフィールドワーク結果をもとに、岡山市沖元と笠岡市横島での道通信仰の広がり方や信仰の種類の違いなどについて、屋敷神的な姿を中心に考察していく。

沖新田東西之図（1818年）

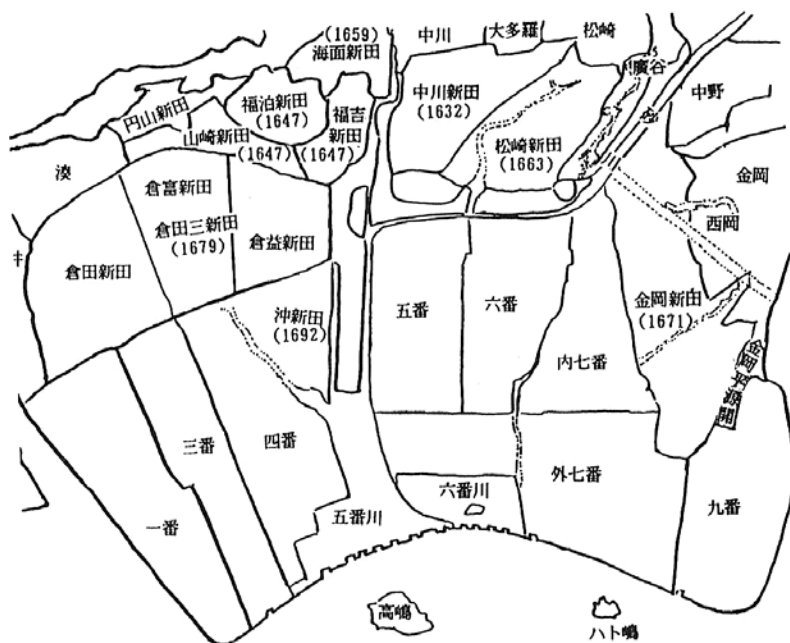


図1、沖新田東西の図
(沖新田開墾三百年奉賛会記念史編集委員会 1995) (2)

第1章 概要・先行研究

1、岡山県岡山市中区沖元地域の道通信仰

(1) 地域の特徴

沖元は、岡山県岡山市に複数存在する開墾地域の一つである。この開墾地は沖新田とも呼ばれ、一番、三番、四番、五番、六番、七番、外七番、九番の八カ村に分けられた。この四番領に沖元村という村ができ、現在は沖元という住所になっている。

新田造りは百姓の数に見合わない土地不足に悩んだ備前藩藩主の池田綱政が、貞享2年(1685年)に沖新田開墾の実施を家臣の津田永忠に命じたところから始まった。工事の延期などもありながら、元禄6年(1693年)におよそ1900ヘクトールに及ぶ大干拓地として、一応のかたちを整えた。後に詳しく記す清水家は、沖新田の四番領の名主に任命された。沖田神社もこの四番領に位置する。

沖新田への入植者は、岡山の和気、赤磐、邑久

郡方面及び備中浅口郡(現在の笠岡市)の出身者が多かった。

初期の入植者の生活は厳しいものだったようだ。『沖田村誌』には以下のように書かれている。

移住民の苦勞したのは日々の農事ことは勿論であるが、毎日の生活も実にみじめなものであった。第一に困ったのは飲用水の不自由であったことである。

(中略)

粗食に甘んじた事も大変なことで、一日中一回はどうしても、団子類を食べねばならなかった。その為には必ず粉をひく、ひき臼がなくてはならない。かめと臼は移住者の必要かくことの出来ないものであった。

(中略)

移住当時は家も極くまばらで淋しいことこの上なく、その上時折、海賊の襲来で丸裸にされる事もあり、人命にかかわる危険なことも

あったと古老は語っていた。(沖田地区連合町内会 1975)⁽³⁾

その一方で、沖新田は旭川や吉井川から児島湾へ流れ出る土砂の蓄積した干潟に手を加えて造られた土地であるため、水害も多く、不安定な土地であったようで、このことも住民達を悩ませた。上記引用と同じ『沖田村誌』に載っている「岡山縣上道郡水害見取圖(明治25年)」には、沖元は「水害最甚敷村落」「村役場浸水」「最も甚敷不毛地」と記されている。

(2) 沖田神社道通宮

1694年に沖新田八カ村の産土神として造られた沖田神社の敷地内には、末社として道通様を祀る道通宮がある。この道通宮はもともと沖元の名主であった清水家の邸内に祀られていたが、1800年頃に沖田神社の末社に加えられたという。道通様と呼ばれているが、主祭神は猿田彦である。道通宮の大祭は毎年4月25日と9月25日の春秋に行われる。

沖田神社の氏子地域は岡山市中区(沖元、桑野、江崎、江並、新築港、倉益、倉田、倉富、藤崎)、岡山市東区(九幡、君津、光津、升田、政津、豊田)である。

沖田神社道通宮には由緒となった伝承が残っている。それを以下にあげる。

今から約400年前の天正10年(1582)6月4日、備中高松城主だった清水長佐衛門尉宗治の次男長九郎が落城の際、敵のスキを伺って、逃走を試みました。その途中で、かねてよく信仰する道通宮に、「首尾よく逃れさせ給らば我家末代に至るまで鎮守として奉祀する」と祈願すると、たちまち靈験顕れ、一匹の白蛇に守り導かれて、浅口郡西大島御滝山に、無事逃れる事ができたのでした。以来道通宮を鎮守として祀り、その子孫は山麓に住居を構えて村民となりました。四代の孫伝兵衛の代になって沖新田に転居し、名主として要職に就いたそうです。沖田桑野小用水には、「これより東伝兵衛」と刻まれた柱が今なお残っています。その後、寛政12年(1800)4月12日沖田神社境内へ宮は移され、沖田神

社の御末社に加えられました。(沖田神社公式ホームページ「道通宮社史」)⁽⁴⁾

この伝承に現れる浅口郡西大島御滝山は現在岡山県笠岡市にあり、後述する笠岡市横島の道通神社から2キロ程の距離に位置する。

沖田神社道通宮、および道通信仰について深く調査した先人達がいるので、沖田神社道通宮についてはその先行研究を中心に進めていく。

佐藤米司氏と湯浅照弘氏は岡山民俗学会に所属し、複数の論文を『岡山民俗』に寄せている。2人は1959年9月25日に共に沖田神社へ現地調査を行った。特に湯浅氏は、その後も道通信仰の論文を多く残している。

佐藤氏と湯浅氏が現地調査を行った1959年9月25日は沖田神社道通宮の秋大祭の日であった。

現地調査当時、道通宮は岩を寄せ集めた上に建てられていたらしい。岩と岩の間は、正面の穴を残し、他の隙間はセメントで固められていたが、固められる以前はあちらこちらの穴から蛇が出入りしていたと噂されていたという。⁽⁵⁾

研究が行われた頃の参詣者は開運祈願が一番多かった。しかし、中には狐が憑いたという人や、道通様が憑いて蛇の姿が離れないという人もおり、そういった人達は憑いたものを離してもらうために参っていた。憑かれるのは女性が多いと調査の記録には残っている。⁽⁵⁾

沖田神社道通宮の崇敬者は沖元周辺だけでなく、京阪神にも分布しており、この調査時には京阪神の信者は沖田神社の氏子(道通宮には氏子はなかったが、沖田神社の氏子はだいたい道通宮の信者だった)よりも多かったという。⁽⁶⁾

この調査の時、沖田神社道通宮についての質問に答えたのは、当時の沖田神社および道通宮の宮司の金谷通博宮司である。

金谷通博宮司によると、道通宮の祭主はもともとA家という、金谷家とは別の家が担っていたらしい。A家が祭主であった時代には祭主は巫女であり、A家の女性が世襲することになっていた。このA家は清水家の本家の近くに住んでいたらしい。金谷通博宮司の先代の頃、明治初期にA家が断絶したため、以降は金谷家の宮司が道通宮の祭主を兼ねるようになった。⁽⁷⁾

沖田神社道通宮の道通様は「祈願神」としての御利益を求められることもあったが、人に憑くとも信じられており、道通様が祟るといふ伝承や、道通様を介して他人を呪う民間信仰があった。以下は沖元の道通信仰に関わる伝承や民間信仰の事例である。

- ・道通宮の信者（沖田神社の氏子）から嫁を貰うことを、近隣の一部の人から敬遠されていた。氏子の嫁には道通様が憑いていて、夫側が理不尽に離縁すると、道通様のオツカイシメに祟られると言われていた。⁽⁷⁾
- ・沖田神社の氏子が嫁に出た。ある時嫁が実家に帰りたいと言ったが、夫はそれを許さなかった。するとその夜、夫が寝ていると、枕の下に蛇がうじゃうじゃと出てきた。その翌晩は嫁の体が蛇に変わり、女性器だけは人間のままだった。気味悪がった夫は、とうとうこの嫁と離縁した。⁽⁷⁾
- ・道通宮の境内に立つノロイ松と呼ばれる松に、ノロイ釘を49本打つ。もし満足に打てなければ呪いが果たされない。ノロイ松に釘を打ちに行く時、道通宮の鳥居の下に黒い大きな牛がうずくまっている。その牛を恐れて、牛を跨がずに、避けて通ると呪いは成就しない。⁽⁷⁾
- ・縁談が破綻した時に行われる呪い。沖田神社道通宮の道通様に卵を7つ供えて呪いをかける。その後境内を一回りし、その間に卵が無くなっていれば願いを聞き届けられたことになる。呪われた人の所には道通様のオツカイシメの黒く小さい蛇が行き、憑いて離れなくなる。⁽⁷⁾
- ・祟りの時のオツカイシメは「ドウツウグチナワ」とも呼ばれる。⁽⁵⁾

(3) 清水家の屋敷神

沖田神社道通宮の伝承に現れる清水家は、道通信仰と深く関わりがある。

清水家は備中高松城の元城主家だった。豊臣秀吉との戦から子孫が落ち延びた際には笠岡市周辺に居住を構え、その後岡山市沖元で名主の職に就いた。佐藤氏と湯浅氏は1959年9月25日に沖田神社道通宮で現地調査を行った後、この清水家を訪ねた。そして当時の清水家当主、清水作夫氏に聞き書き調査を行った。

清水作夫氏の話によると、清水家は秀吉から水攻めを受けるよりも前から、城内で猿田彦を祀

っていたらしい。

落城の際、清水家は伝承にあるように今の笠岡市西大島御滝山に辿り着き、その地に住むことになる。そこでもとから信仰していた神とそのオツカイシメ（清水氏は「オミヤサン」と呼んでいたらしい）として蛇を祀る、小さな社を屋敷内に造った。この社が道通宮と言われたそうだ。⁽⁶⁾

そして四代目の孫伝兵衛の代に沖元の新田へ移り住み、名主として要職に就き、沖新田の田畑の経営などの業務を請け負った。沖田桑野小用水には、「これより伝兵衛」と刻まれた石碑が現在も残っているようだ。道通宮は沖元へ移る時に一緒に持っていった。⁽⁶⁾

1959年当時も清水家には道通宮があり、清水の家の守り神として一族で祀られていたらしい。この頃には正月と、沖田神社道通宮の大祭と同じ4月25日と9月25日に蓮根やスルメを供えるぐらゐの儀式しか行っていなかった。⁽⁵⁾

清水家本家は沖新田四番領の名主一族であったが、その分家も西大寺五幡（本家のあるところと川を挟んだ向かい側）に住み、五幡用水の樋守りとして権力を持っていた。この用水の樋門の開閉は清水家が行っていた。清水家は沖元、またその周辺地域で、農業に関して強い権力を持っていたと言える、と湯浅氏は述べている。⁽⁵⁾

(4) 周辺住民の道通信仰

1959年の調査を行った湯浅氏は、沖田神社道通宮周辺の地域に根付く道通信仰の例を、さらに詳しく調査していた。

当時は岡山県南部各地に、道通様を祀った宮や祠があったらしい。特に新田開発地に立てられていることが多かったと湯浅氏は感じたそうだ。⁽⁶⁾

なかには道通宮と呼ばれるものも多数あり、主祭神はやはり猿田彦だった。しかし猿田彦だけを祀っているようなところはほとんどなく、他の神と一緒に祀られることが多かったらしい。⁽⁸⁾

湯浅氏の調査結果の中に、具体的な土地名まで記された道通宮の例が1つだけあげられていた。

・旧西大寺市坂本 道通宮

この道通宮でも道通様のオツカイシメは蛇とされていた。道通宮は民家の屋敷に祀ってある。この家が祭主であり、1960年当時は2代続いて巫

岡山県南部地域の道通信仰について

女が祀っていたらしい。⁽⁷⁾

また、宮や祠以外に、岡山県倉敷市の中庄という地区では、家の中の神棚に道通様を祀る人もいたらしい。

湯浅氏は、岡山県南部の祈祷家たちのなかにも道通信仰が根付いていると考え、沖元周辺の祈祷家の調査を行っていた。以下は道通信仰に関わる祈祷を行っていた例である。

表1、道通信仰関わる祈祷家の表
湯浅氏の研究⁽⁷⁾⁽⁹⁾を参考に平田が作成

岡山市 F さん (女 性・当時三十 四歳) ㊦	・沖田神社道通宮の道通様のオツカイシメの祟りを断つ祈祷家。㊦ ・神体は沖田神社道通宮のオツカイシメだが、その教えは鞍馬弘教というもの。㊦ ・一九六〇年の時点では、沖田新田地帯の人々がFさんにオガミに行っていた。㊦
岡山市倉敷 K家 ㊦	・道通宮のオツカイシメについての祈祷を行っていた家だが、一九六〇年には祈祷は行われていなかった。㊦ ・天神様を祀る。㊦
旧西大寺市 下之町 H 氏 ㊦	・湯浅氏が調査したなかでは一番広く信仰されていた祈祷家。㊦ ・「不動明様、不動様」と呼ばれていた。㊦ ・道通第一に信仰しているわけではないが、道通様(沖田神社の白いカラツ製の蛇)や稲荷様を一緒に祀っていた。㊦ ・当時は道通様の蛇の祟りをなくす祈祷もしていた。㊦

湯浅氏は調査を振り返って、道通様の祟りを祓うという祈祷家は減少しつつあったと湯浅氏は感想を述べている。⁽⁹⁾

2、岡山県笠岡市地域の道通信仰

(1) 地域の特徴

岡山県笠岡市は瀬戸内海に面しており、岡山県と広島県の県境に位置する。大小30あまりの島々からなる笠岡諸島を有しており、このうちいくつかは近世から昭和の数々の埋立事業により、本土と陸続きとなっている。

道通神社のある横島ももとは孤島であったが、延宝2年(1674年)の新田開発により本土と地続きとなった。その後も開発は繰り返され、昭和33年(1958年)の笠岡湾干拓事業を経て、現在の形になった。

笠岡の笠岡湊は瀬戸内海航路の要港として開けており、織田信長の中国進出と対峙する毛利勢が交通の要地、港町として、また軍事基地として重視していた。毛利氏の家臣であり村上水軍の将の村上氏が笠岡城の城主であった時期もある。

(2) 道通神社

道通神社は、笠岡市の横島地域に建てられている。

旧村社で、主祭神は猿田彦。例祭は4月第2日曜と前日に春季大祭、7月第2日曜と前日には夏期大祭が、12月第2日曜と前日には冬季大祭が行われている。冬季大祭は、以前は12月20日に行われていたそう。

永禄年間、陶晴賢が笠岡城主であった頃に御神霊を笠岡市本土の道通谷に祀っており、周辺住民の崇敬社としていた。しかし戦禍のために永禄年間1570年頃に、当時の城山城主村上隆重が孤島であった横島に奉じたと言われている。この神社の起源であるとされる伝承が残っている。

天正年間(1573～92)、横島に磯兵衛という漁師が、ある日、村の沖合いへ投網に出かけたが、3度が3度網を投じて同じ石ころがのってくる。妙だなと思いつつ翌日出かけてものってくる。さらにその翌日出かけてもまた網にのってくるので、これは不思議なことだと、この一塊の石ころを笠岡、大磯の道通谷にまつた。しかし戦国時代、神事・祭事をだれもかえりみる者がなく、神祠は荒れるに任せていた。また災害が続いて穀物が実らず、農民は苦しみ疲れ切っていた。そこで、卜師をよんで、その故をうらなってもらったところ“まさしく道通さんのたたり”だという。そのため、ご神体を横島に奉じてきて社殿を造り、大いに祭典を行った。それから災害もあとを絶った。元和年間(1615～24)に至って拜殿を造営した。(神島協議会 1985)⁽¹⁰⁾

氏子圏は笠岡市沿岸部(横島、新横島、美の浜)である。⁽¹¹⁾

1981年に刊行された『岡山県神社誌』には、道通神社には氏子の他に西日本全体に崇敬者がおり、その数は3万人以上だと記されている。

昭和の頃には「祈願神」として祀られていたが、人を呪う、人に害を為す蛇の神だと言われることもあった。現在は蛇の信仰があることを知らない者も多く、氏子圏内の私の同世代に話を聞くと「小さい頃夏祭りにいったことはある」といった話ぐらいしか聞けなかった。商売繁盛や出世開運の神

として信仰されている。

道通神社にまつわる民間信仰は以下のものがあげられる。

- ・社殿の横の土塚の上には「瓦クド」という小さな家の形をした祠のようなものが沢山並べられている。これは道通信仰の信者達がそれぞれ置いて祀っているのだという。⁽¹²⁾
- ・神社から2匹の蛇の向き合ったお札をもらって帰って、耕地に立てておくと虫がつかなくて作がよく出来るらしい。⁽¹²⁾
- ・参詣すると治らなかった病が治る。カエルを年の数ほど持って参るといいと言われている。⁽¹³⁾
また、民間信仰や由緒以外にも伝承が次のように残っている。
- ・横島の道通様のノロイ松は中が空洞になっていて、ここには75匹の眷属がいたという。今は本殿の裏に瓦宮（瓦クド）が信者によって多く献上されているが、この瓦宮は75匹の眷属のために献上している。⁽¹⁴⁾
- ・明治の初め、道通神社の裏手の樹木を伐採しようとすると、蛇がうじゃうじゃ出てきて樹を伐れなかった。また、監督の官吏は腹が痛み苦しんだ。その逆に、腹が悪い人が道通神社を参ると治る。⁽¹⁴⁾
- ・笠岡市の道通神社の信者が満州事変の際に、本隊からはぐれて道に迷った時、蛇の進む方向に行って、無事本隊に戻れた。⁽¹⁴⁾

(3) T家の屋敷神

笠岡市内にも、沖元の清水家のように、家の敷地内で道通様を祀る家がある。

笠神社の参道沿いに住んでいたという記録⁽¹⁵⁾が残っているT家は、もとは笠神社の宮司家であった。T家の邸内には道通神社が祀られている。

主祭神は猿田彦で、T家に残る文書には、1751年から1818年には猿田彦神社という名前だったとあるそうだ。

このT家の道通神社には、横島の道通神社の名前が現れる伝承が残っている。

昔、漁師の網に1つの陽石がかかった。陽石は2つに折れていたのので、フグリの部分をこの宮の神体石とし、竿の部分を横島の道通神社に祀ったと言う。(郷土史愛好グループ 1998)⁽¹⁵⁾

沖元の清水家のような道通宮ではなく「道通神社」とされているが『岡山県神社誌』には「道通神社」という名称は横島の道通神社のみで、T家の道通神社は載っていない。

(4) 周辺住民の道通信仰

笠岡市横島では道通神社が信仰され、本土ではT家の屋敷神的な道通信仰の存在が確認されている。

その周辺では道通信仰はどういったものかと思われていたのだろうか。笠岡諸島の民俗を集めた資料⁽¹⁶⁾からまとめてみる。

笠岡諸島では道通信仰の信仰対象は「ドウツウ様」と呼ばれ、神のオツカイシメであり、人を呪う憑き物であるという認識がされていた。

【北木島】

- ・ドウツウ様は首に輪形のある子蛇。洪水があると備中から島に流れ着いてくる、と言われていたが、1974年の時点では「今はほとんど見かけない」と記載されている。盗難があるとそういう人（おそらくドウツウ様を使う祈祷師）に頼んで、泥棒へドウツウ様を追いかけさせた（憑かせた）こともあり、これは1920年程のことだ。
- ・笠岡でテグリ漁をやっていたら、何度も茶碗が上がった。不思議なので拜んでもらったら横島の道通様に参れと言われたことがある。

【大飛島】

- ・山の中にドウツウ様を祀っていた。下野嘉助という人が勧請したものだという。祭りにはオゴク（お供えのことか？）を供えて後で信者が頂く。恨みのある人にオツカイシメを追いかけさせることもあったらしい。横島のドウツウ様はよくおかげがあるという。

【小飛島】

- ・頭に鉢巻のある蛇をドウツウ様という。

周辺の島々でも道通信仰は伝わっており、それは憑き物のように人を呪う性格が前面に出ている。また、ドウツウ様はもとより島にいたというよりは備中、つまり笠岡市から流れてきたり勧請したりするもので、特に強いご利益があると言わ

岡山県南部地域の道通信仰について

れていたのは横島のドウツウ様だった。

笠岡の島々にも道通信仰は伝わっており、笠岡市横島の道通神社がその信仰の中心であると信じられていた。

第2章 現地調査

第2章では、沖田神社道通宮と道通神社の2社へ実際に赴き、宮司達を対象に行った聞き書き調査の内容をまとめる。直接話を聞き、電話にて不足していた情報を質問して補った。

当初は清水家とT家の方への質問も考えていたが、両家とも都合がつかず、今回は断念した。

1、沖田神社の宮司への聞き書き

○道通様と蛇

道通信仰における信仰対象である道通様は、よく蛇とともに語られるが、蛇の姿をしているわけではない。道通様は猿田彦のことを言い、蛇は道通様のオツカイシメである。

また、猿田彦のことを「道通様」と呼んでいるのではなく、道通信仰の神様は猿田彦で、その猿田彦のみを「道通様」「道通さん」と呼んでいた。聞き書きの中で、猿田彦の話や猿田彦を主祭神とする他の神社の話も出たが、宮司は「道通様」とは呼ばずに「猿田彦さん」と呼んでいた。

オツカイシメの蛇は「巳様（ミーサマ）」「巳さん（ミーサン）」と呼ぶ。沖田神社道通宮には後述するが「お岩場」という場所があり、ここに棲みつく蛇たちは巳様と呼ばれていた。現在は数を減らしているのか、以前よりは蛇を見かけることは少ないようだ。

また、道通様がいつから道通様と呼ばれるようになったのかはわからない。「道が通づる」という意味として、清水家が備中高松城に住んでいた頃から呼ばれていたのだろうと、宮司は認識している。

余談になるが、現在の沖田神社の宮司は白い蛇を買ってきて、神社で飼おうとしたことがあるらしい。結局周りの人に止められ「お岩場」に放してしまった。

○沖田神社道通宮

前述した通り、この道通宮は沖田神社の境内社で

ある。現在、ここの管理は沖田神社がしており、道通宮の縁日や春秋の祭りも沖田神社が行っている。

沖田神社道通宮は沖田の四番の住所にあるため、「四番(シバン)の道通さん」と呼ばれることも多い。

1995年には道通宮を、2011年には沖田神社を改修した。材料には奈良の吉野の木や、800年持つ瓦など、最高級品を用いることができ、それを信仰者からの寄進で賄えた。多くの人の信仰を集めていることの表れであるとも言える。

○年間行事

毎月1日と15日は道通宮の縁日である。それぞれ「一日参り」「十五日参り」と呼ばれる。沖田神社側は特にこういった行事の宣伝などはしていないが、信仰者からの寄進で経営が成り立つほど篤く信仰されている。

○信仰者

道通信仰の信者が沖田神社の道通宮を訪れるようになったのは、明治前後くらいからだろうと宮司は考えている。その頃には岡山市内から遊郭の遊女や商売人が、強い神を求めて沖元の沖田神社道通宮へ参拝していた。現在の宮司はこの話の際に道通様を「強い神様」と表現していたが、これは道通様が「人を崇めるほどの強い神である」という意味である。

戦時中や戦後の時期は、米を賽銭代わりに持ってくる人が多く、神社では消費できないほど余ることもあったので、食べ物に困る参拝者達に配っていたこともある。遠方から訪れる参拝者は、徒歩で道通宮までやってきて、神社へ1泊泊まって帰っていく人が多かった。

現在、御祈祷でよく願われることは家内安全、交通安全、病気平癒、厄払いなどが多い。道通様の他者を崇る面にあやかり、厄払いは「悪いものを祓ってほしい」「憑き物を落としてほしい」といったものがある。

家の敷地内に道通様を祀っている家は清水家以外にも存在する。岡山市内では、家に祀られる以外に、町内に祠が建てられていることもある。岡山市外なら、瀬戸内や赤磐、邑久、長船に家で道通様を祀るところが多い。

現在、家に道通様を祀る場合、「みたまわけ」

ということで道通宮からもらった御札を祠やお宮に祀ったり、御札そのものだけを祀ったりする。最近はお宮を立てず、お札だけで道通様をお祈りする人が多い。逆にお宮を潰す場合は、沖田神社の宮司が直接赴くことなく、信仰している人たちがそのまま御札を返しに来る。

○崇り

沖田神社も清水家も、道通様が強い神様だと宣伝はしていないが、御祈禱やお参りに来る信仰者は絶えない。

以前は道通宮の裏手の杉の木に、藁人形や五寸釘が刺さっていることもあった。宮司がこの木を材木関係の業者に見せたところ「こんな穴ばかり開いたもの、何にも使えない」と言われるほどだった。

○清水家

沖元の清水家本家の道通宮は今もある。沖田神社のすぐ裏に住んでいるらしい。

清水家が城落ちしてから現在まで約400年経つ。

城から笠岡市西大島まで逃げてきてから、100年は西大島で暮らした。落ち延びる際に清水家は道通様を持って逃げた。清水家は備中高松城に居住していた頃から道通様を祀っていたが、他にも城内で神社や寺も置いていた。しかし落城時には寺と神社はそれぞれ元の寺社へ返し、道通様だけを西大島まで持ってきたのだという。寺の方は不明だが、神社は岡山市内の最上稲荷へ返した。

西大島で暮らして100年、藩主の池田家に仕える津田永忠の命で、清水家は沖新田の名主になった。この時に清水家は西大島から沖新田へ居を移すが、一部の人達は墓を守らねばと西大島へ残り、現在も暮らしているらしい。

1800年頃に、沖田に住む清水家からの申出により、道通宮は沖田神社の境内社に加えられた。清水家の「産土神の沖田神社さんに入れてもらえたら、永く道通様を守ることができる」といった理由からだたと沖田神社には伝わっている。また、道通様の話を聞いて清水家以外の人清水家本家へ道通様目当てで訪れることもあったようで、一般の人も道通様を参れるように沖田神社へ道通宮を加えてもらった、という理由もあったそうだ。

この頃には沖田神社の宮司が清水家に赴き、清

水家の道通様のお祭り（後述する慰霊祭）の世話をしていた。しかしこの100年は清水家だけで祀っている。道通様の強いご利益の話を書いて清水家の道通様のお祭りに沢山の人が訪れることもあったが、現在は清水家ではなく沖田神社道通宮に訪れるようになっている。

清水家が沖田神社やその境内の道通宮の年中行事に直接関わることはないが、以前は沖田神社に灯籠や鳥居を奉納することもあった。灯籠は大きいものを4つ（大きすぎて危ないということで、現在境内にあるものは別のもの）、鳥居は道通宮の前にあるものを寄付した。現在はそういった寄付などはない。

清水家は親族間で慰霊祭という名の道通様の祭事を行っており、100年ほど前までは沖田神社も参加していた。現在の沖田神社宮司は全く関わっていない。清水家から呼ばれることもないので、現在慰霊祭がどういった形で行われているのか、そもそも現在も開かれているのかもわからない。備中高松城の方では年に1回、大々的に清水家の行事を行っているが沖田神社は関わっていない。

数年前、笠岡の西大島に残った清水家の人が沖田神社道通宮に参拝にきたことがあった。その人曰く、西大島には道通様の神社はあるが「中身は空っぽで外側だけ守っている。道通様は本家が沖元へ持っていった」らしい。

沖田神社の宮司は、清水家本家が分家に道通様を御霊分けしたという話は全く聞いたことがないそうだ。また、清水家が他の家に道通様を分けたという例も聞いたことがなく、清水家以外の家が敷地内に道通様を祀るようになったのは、道通宮が沖田神社の撰社に加わってからだと認識している。

○笠岡の道通神社について 沖田神社宮司の認識

笠岡市横島の道通神社の話は

「昔、道通宮からもらった御札を、古くなったら川へ流す習慣が沖元にあった。その御札が笠岡まで流れていった。御札を網にかけた漁師が家に持って帰ったところ、大漁が続く。これは自分だけが持っていてよいものではないということで、横島の八幡様に祀った」

と沖田神社には伝わっている。

沖田神社道通宮の碑には、道通宮は笠岡の横島

岡山県南部地域の道通信仰について

から勧請したと書かれているが、それは明治の合祀の際「道通様は清水家という特定の家が祀っていた神」と正直に書くといかにも怪しげな神に思われてしまうので、横島の道通神社から勧請したということで申請したからであると、沖田神社の宮司は認識している。

○現地調査



図2、道通様へ供える卵（撮影：平田）

道通宮の賽銭箱の横には、藁で作られた蛇の作り物がある。この蛇は口を大きく開いており、その中に参拝者達が生卵を供える。宮司によると、蛇は卵を食べるから卵を祀るのだ、とのことだった。生卵は線香やろうそくの横で、1個50円で売られている。

道通宮の裏手に「お岩場」と呼ばれる場所があり、そこへ参ることを「お岩参り」という。道通宮の石組のある場所で、その岩と岩の間によく蛇が出入りしていたという。今もたまに見かけるそうだ。こちらには祠があり、ここにも生卵を供える人がいる。2匹の白蛇がとぐろを巻いた、手に乗るくらいの陶器の像もいくつか並べてあった。

お岩場には小さな祠がたくさん積み重ねられていた。形は道通神社の瓦クドと同じものだった。宮司さんによると、これは神社へ返された道通様で、家で祀っていた道通様を信仰者達がかこへ置いていくのだそうだ。

2、道通神社宮司さんへの聞き書き

○道通様と蛇

道通様が蛇なのではなく、道通様のお使いが蛇で、その蛇を巳様（ミーサマ）と呼ぶ。これは沖

田神社道通宮と共通している。道通様の言葉の人々に届けるお使いだからということで、道通神社境内の巳様の石像や白い陶器の像は巻物を咥えた蛇で表されている。

笠岡の道通様の巳様は、体の色は関係なく、首に輪をしているような柄が入った小蛇を指している。

○道通神社



図3、道通神社（撮影：平田）

道通神社は笠岡市の横島にあり、近世までは本土とは海で隔てられていた。埋め立て後は本土と陸続きになるが、神社の参道は海に続いていた。80年程前までは、四国や広島県福山市などからは道通神社まで船を出してお参りしていたらしい。

道通神社の由緒に現れる石は、現在もご神体に使われており、本殿に四つほどある。他にも本殿には木彫りの巳様、陶器の巳様があるそうだ。

概要に記した2匹の蛇が向かい合った札は、畑の虫除けというよりは厄除けの札という意味合いで通っている。畑の虫はもちろん、家に入る泥棒も除ける。

秋には毎年、岡山県高梁市の木野山神社と一緒に儀式を行う慣習があるが、その理由は道通神社の宮司にもわからないそうだ。木野山神社も狼信仰という珍しい信仰を持っている。

道通神社の宮司は、道通様は水難を除け、航海を助ける海の神ではないかと考えている。道通神社が横島に祀られる前にあった場所は当時海辺であり、また現在神社が建っている横島ももとは孤島であった。道通神社の神紋は「道」という字を丸で囲み、花びらのようなものに縁どられているが、この花びらはおそらく波を表しているのだろう、と宮司は道通神社の成り立ちについて考察している。

○年間行事

一番大きな祭りは冬季大祭である。冬に行っているが、新穀感謝祭ということで米を祀り、その年の豊穰を祝う。この例祭は氏子のお祭りで、子供が担ぐ船みこしが出て、氏子圏を練り歩く。

月に1度の月次祭は朝の8時、満潮の時に儀式を行う。引き潮と、正午から後の太陽が傾いていくタイミングからは不吉なので、儀式は午前中に行う。神主がこの氏子の人々の生活がよくなるようにと祈祷を行う。昔は氏子さんや信仰者が多く来ていたが、現在は年齢層が上がり、来る人は少ない。

道通様を祀る祭事は行われていない。

○信仰者

氏子よりも、氏子圏外の道通様の信仰者の方がよく参り、信仰心も篤い。現在の信仰者は京阪神、中四国、また笠岡諸島からが多い。岡山県内では邑久・津山・新見・倉敷の辺りの信仰者がよく道通神社へ参拝に来る。

道通神社を訪れる人の大半の祈願、祈祷は厄難。病気祓いや、家や本人に悪いものが憑いたから落としてくれ、という種類のものがいまだに一番多い。ひと月に100人くらい神社を訪れるとしたら、そのうち30人～40人は厄払いの祈祷を頼む。この厄は悩み事の厄、蛇を殺したという厄、厄年関連、人間関係などがある。

現在も、体調が悪かったり不連続きだったりする人がオガミヤ⁽¹⁸⁾に拜んでもらうと「道通神社に行って、悪いものを落としてもらうべき」と言われ、道通神社に御祈祷をお願いにくる例があるという。

厄除け以外にも商売や勝負事の祈願に来る人もおり、有名なスポーツ選手も通っているらしい。

道通神社への信仰の篤さは御祈祷料にも表れており、道通神社の宮司家は、信仰者からの御祈祷料だけで生活が成り立つほど、強い信仰心を集めている。

家の敷地内に道通様の神社を建てる信仰者は邑久、津山、新見、倉敷、広島県福山市などに多い。庭に瓦造りの立派な社を持つ家や、屋内の神棚へ道通神社のお札を立てるなど、祀り方は様々だそう。

現在、岡山県内の信仰者から「家を引っ越す」「年をとったから」といった理由で、道通様を祀る宮や神社を仕舞ってほしいというお願いをされることが多いらしい。「仕舞う」⁽¹⁷⁾というのは、簡単に言え

ば道通神社に道通様の御札を返し、社を取り壊すことだ。道通様を仕舞う時は、宮司が直接赴いて儀式を行う。儀式には塩、酒、木の皮を使うそうで、木の皮は刻んで、半紙と塩と混ぜて、場を清める。

笠岡にも敷地に道通様を祀っている家はあったが、ほとんど道通神社へ御霊を返し、社は仕舞ってしまった。

逆に新築を建てた際に、社を造って道通様を祀る人もおり、これはオガミヤ⁽¹⁸⁾さんに多いという。現在はほとんどいないそうだが、そういった時には御霊分けということで道通神社から御札をもらい、年に1度道通神社を訪れ、新しい御札を貰って帰るという。

○崇り

昔は漁師同士の喧嘩の引き合いに道通様が出されていた。横島と寄島の漁師の縄張り争いでは、寄島の漁師が「神様に崇らせてやる」など言っていたらしい。

道通神社の瓦クドの場所には、人を呪う儀式が行われた形跡が今もたまに残っている。以前は五寸釘や藁人形など、いわゆる丑の刻参りに似た儀式的物が残っていた。現在は瓦クドの中に、目などの顔の一部を焼いた、個人の写真が残っていたりするそう。宮司が言うには「現代風になっとる」とのこと。

○道通神社とオガミヤ

岡山はオガミヤが沢山いる地域だ、と宮司は感じるようだ。

道通神社を訪れるオガミヤも多いそうで、そういったオガミヤは自分の力が弱まったと感じた時などに参拝する。夜中に道通神社へ参ってきて、道通様に言葉を捧げたり太鼓を叩いて舞ったりして、心身ともに清めてまた力を取り戻す、といったことを行う人が現在いるらしい。また、自分のところへ相談に来た人を伴い、境内で儀式を行うオガミヤもいる。実際に宮司も、数珠のじゃりじゃりした音や、何かをぶつぶつと唱える声が、22時頃に神社の敷地内から聞くことがあるのだという。

現在は落ち着いた方で、昔はもっと好き勝手に儀式を行うオガミヤが多かった。蠟燭などに火をつけて拝む時は火事になるのではないかというほ

岡山県南部地域の道通信仰について

ど明るく焚き、酒や米を境内に撒くなどして「わやくそ」⁽¹⁹⁾にして帰っていった。その頃は毎朝の掃除が大変だったようだ。

○ T 家

元笠神社宮司の T 家は現在、笠岡市から県外へ引っ越している。引っ越す前は笠岡の本土に住んでいたそうだが、今は他の人の土地になっており、家も敷地内の道通神社も今は残っていない。

T 家が引っ越しても、笠神社宮司の母親（T 家当主の母親）は 10 年ぐらい前までは同じところに住んでおり、道通様を仕舞い、土地を全て売るまでそこで暮らしと信仰を続けていた。

道通神社の宮司は T 家とも親交があり、引っ越しの際には T 家の先祖の位牌やお墓の整理をした。T 家が笠神社の宮司を担うようになったのは天保の頃らしい。引っ越し後の土地の交渉にも道通神社の宮司が加わった。T 家の道通様を仕舞ったのも、道通神社の宮司が世話をしたようだ。

道通神社の宮司家と笠神社の宮司家には深い関わりはあったが、互いの神社の祭事に参加するようなことはなかった。

○ 岡山の沖田神社道通宮について

道通神社宮司の認識

岡山市の沖田神社の道通宮も、笠岡市の道通神社が由来だという認識を宮司はしている。

沖田神社道通宮との付き合いや、祭事を合同で行うようなことは一切ない。

○ 現地調査

道通神社の賽銭箱の横に、卵が 1 つ供えられていた。沖田神社道通宮のように神社側が提供しているわけではないが、信仰者には蛇と卵を結びつけるという共通の観念があるようだ。

境内には「カエリミヤ」という社がある。これは阪神淡路大震災の被害により、神戸から戻された道通様の社だという。

境内社にはアメノウズメノミコトの社もあった。宮司によると、猿田彦の奥さんだからという理由からだそう。

本殿の裏手には蛇の像や瓦クドが置かれている。そこには立派な蛇の像が 2 つあり、新しい方

は口に巻物を咥えた一匹の蛇、古い方は 2 匹の蛇がとぐろを巻き合わせている。



図 4、新しい蛇像（撮影：平田）



図 5、参道から見上げた鳥居（撮影：平田）



図 6、並べられて瓦クド（撮影：平田）



図 7、瓦クドの中（撮影：平田）

古い方の蛇像を囲むように円状に瓦クドは並べられている。瓦クドの中にはそれぞれ手の平に乗る程の陶製の白い蛇の置物が入れている。形は古い方の蛇像と同じく、2匹の蛇をモチーフにしたもの。1つの瓦クドに1つから5つの置物が入っている。

瓦クドの円の中には「龍王社」という石造りの祠があった。以前は雨乞いや夏祭りの時に、神社の正面の山の頂上へ登って御祈禱する慣習があった。しかしその参加者たちが高齢になり、また道の厳しさや整備の難しさより、山頂よりも低い所へ置きたいということで作られたのがこの龍王社。宮司は雨乞いの神様だと認識していた。

第3章 考察

1、沖田神社道通宮の考察

道通信仰の広がり方、個人宅の敷地内で祀られる風習について、屋敷神の観点から考察したい。

屋敷神とは、ある家の敷地内、もしくはその家の所有する土地に祠や宮を建てて、その神を祀る信仰である。ひとつの部落内で、特定の家でのみ信仰されることもあれば、各戸それぞれで祀られることもある。祀られる神も様々で、稲荷などの全国的にメジャーな祭神を信仰するところもあれば、「ウチガミ」「チヂン」「荒神」など独特な呼び方のされる神を信仰するところもある。その性格は家族や土地を守るといった面もありながら、祀る家や他家も含め、強く崇ると信じられている。柳田國男は、屋敷神とは祖霊信仰がもとになっていると考察した。現在、その数は減少したが、今でも信仰を家の敷地内で続けている例は残っている。また、もとはある一族が祀っていた屋敷神が、その土地の氏神として神社に祀られている土地もある。

今回屋敷神について考えるにあたって、特に直江廣治氏の研究を参考にした。

以下、直江氏の考察した屋敷神の分化と拡大を私が図化した。

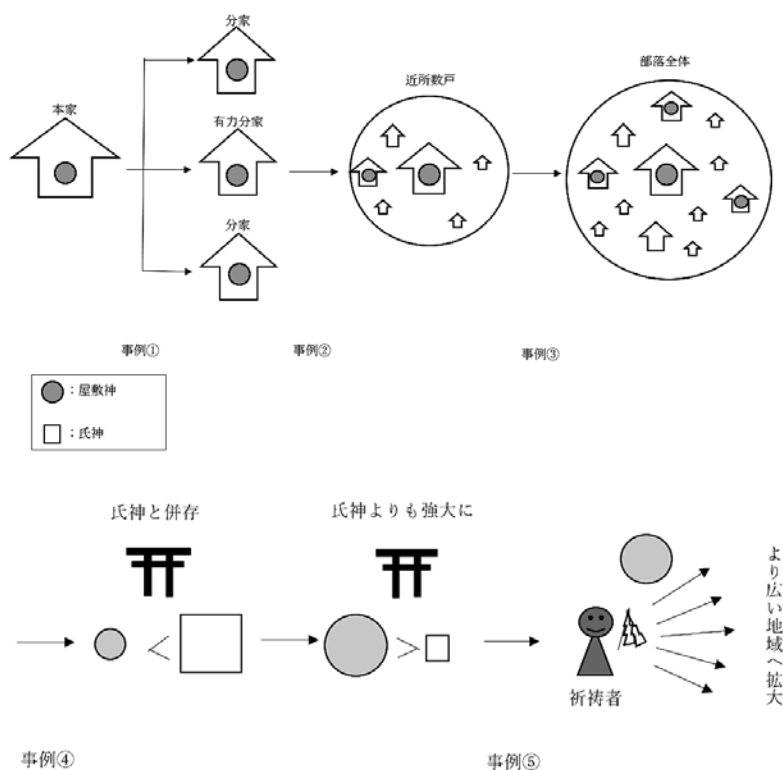


図8 (上の図)、図9 (下の図)、直江氏の屋敷神の分化・拡大を平田が作図

岡山県南部地域の道通信仰について

直江氏の著書『屋敷神の研究 日本信仰伝承論一』⁽²⁰⁾で用いられた根拠となる事例とともに、屋敷神の分化と拡大の様子を解説する。

もともと屋敷神は本家のみ祀られ、その一族の分家たちが祭事などには本家へ赴いて参加するという形であった。現在でも一部地域では部落の有力な家でのみ祀られる屋敷神が残っている。

しかし、本家第一といった同族結合が崩れ、分家の中にも力を持つものが現れる。本家は分家にも屋敷神を分けなければならなくなり、次第に新たに分家する場合に屋敷神も分けるということが慣習となる。

【事例①】

岩手県胆沢群相去村六原では（現、北上市）では、分家する時は、本家のウチガミとしての明神様を分けてもらう。⁽²¹⁾

本家以外も祀れるようになった屋敷神は、続いて民衆の間に広まっていく。まずは小さな規模、屋敷神を祀る家の周辺数戸の非血縁者達が、屋敷神の祭事に参加するようになる。

【事例②】

愛媛県南宇和郡城辺町僧都の大野宇佐太郎氏宅（屋号大モト）の屋敷神は、豪臣神社と呼ばれ、11月3日（氏神若宮神社の祭日）に旗を立て、注縄を張り替え、御幣を立てて祀っているが、近隣六戸ほどがオコモリに来る。京都から落ちてこられた、貴い男女二方を祀ったものと伝えられている。その女性は旗を織っているところを、追手に射殺された。その祟りか附近に悪疫が流行したが、大野家だけは、お祀りしていたお蔭で、病気にかからなかったという。⁽²²⁾

この数戸で行われた祭事がさらに大きくなり、信仰圏が部落全体に広がる。以下の事例③は部落とは書かれていないが、部落内の組で屋敷神を管理している例だ。

【事例③】

（愛媛県南宇和郡地方）一本松村中川大字大又（現、一本松町）にイエタカさまというのがあ

り、新田亀雄氏とその組の11軒で祀っている。

（中略）

祭日には、組の当番が夜から昼にかけて祀り、供物は米・濁酒・肴などで、男が調理する。⁽²³⁾

部落全体で祀られるようになった屋敷神の中には、その後、部落神や氏神と併存されるものや、部落神や氏神よりも台頭するものが現れる。時にはその知名度や信仰が、もとの主祭神を飲み込むほどにもなる。

屋敷神が部落神や氏神と併存した際、もともとその屋敷神を持っていた家が、神社の祭事において重要な役割に就いたり、神社の由緒に家の名前が残ったりすることが多い。

【事例④】

（愛媛県南宇和郡地方）御荘町岡字永岡の氏神は、コウモリ様と呼ばれるもので、尾崎友吉氏方に祀ってある。お籠りは旧9月17日（現在11月3日）で、もとは祠は草屋根であったが、毎年葺きかえが大変なので瓦にした。神社合祀の際、法印の尾崎氏（友吉氏ではない）が、そこのマツリ神として届けて残した。作神様で、コクモリさまが訛ったのであろうという。祭りの時は約100戸が四組に分れ、2、30人が代表で社にこもった。⁽²⁴⁾

屋敷神の拡大には祈祷師などの宗教家達の働きの影響も強い。祈祷師のお告げにより屋敷神を祀るようになったり、祈祷師からの助言に屋敷神の名前が出たりする例などが多くある。図においては氏神からさらに全国へ広まる様を描いたが、事例③～④にも祈祷師の力による例もある。またそもそも屋敷神が生まれた所以が祈祷師によるという例もある。

【事例⑤】

徳島県那賀郡木頭村では、大夫（祈祷師）の勧告によって祀られるようになった屋敷神が少なくない。例えばA家の屋敷神は、墓を移したら祟ったので、その先祖を祀ったものだという。B家では、子供の神が異様に赤く、かつ病身なので大夫さんにみてもらったところ、その家がかつて火事で焼けた時に、牛小

屋の牛が焼け死んだ。その牛の祟りだというので、祠を立てて祀るようになった。⁽²⁵⁾

直江氏の例で、わかりやすい事例⑤を見つけれなかったので、上記は祈祷師の介入で祀られるようになった屋敷神の例になる。

また、祈祷師は拡大の手助けにおいて大きな影響を持つが、「屋敷神は祟る」という要素も祈祷師の影響によることが多い。上記の例などは「祟る原因を祀れ」と祈祷師に勧められている。

屋敷神には、地域の有力一族の本家だけが祀っているタイプ、特定の一族たちがそれぞれの家で祀っているタイプ、血族関係なく部落内の各戸で祀っているタイプ、家だけでなく氏神の神社の境内社にも加わっているタイプなど、様々な形で信仰されている。この多様さは、上記の図の過程を経て生まれたものである。

以上の直江氏の屋敷神の分化・拡大を、沖元の清水家で考察してみる。

沖田神社道通宮と清水家についての事例は、佐藤氏と湯浅氏の現地調査⁽²⁶⁾、私が行った聞き書きを主に参考としている。

まずは本家の屋敷神が分家に分けられたかどうかについて。

道通様ではないが、清水家は分家を出す際に、本家の家の中で祀っていた「エビス様」を分家に分けたという調査記録が残っている。

例えば西大寺五幡（岡山市沖元より百間川をへだてた向側）の清水清一氏役は五幡用水の樋守として昔から非情な権力をもっていた。

（中略）

興味あることは清水清一氏の先祖が分家するときエビスサマを沖元の清水家から貰っている。（湯浅照弘 1959）⁽⁶⁾

はじめは清水家が家の守り神を分家に分け与えているので、同じく家で祀っていた道通様に関しても同じことが行われた可能性があると考えたが、沖田神社宮司へ聞き書き調査を行った際に、清水家が分家へ道通様を分けたということは聞いたことがない、と言われた。

笠岡市西大島へ残った清水家の人の話を振り返ってみても、道通様の神社はあるが中身は空っぽで道通様はいない、と沖田神社宮司へ話していた。

清水家と沖田神社の関係は現在では希薄であるそうだが、沖田神社の宮司家は以前、清水家の道通様の祭事に参加する程、清水家との関係は強かった。その沖田神社に清水家の御霊分けの話が伝わっていないということは、道通様の御霊分けという慣習を清水家は持っていなかったと考えてよいだろう。

屋敷神の道通様は、清水家が沖田神社の境内社に道通宮を加えてくれるよう頼むまで、一族で本家の道通様のみを祀っていた。

この時点で清水家の屋敷神的な道通様は、直江氏の考察した屋敷神の拡大には当てはまらない事例であると考察する。

これを踏まえて、沖元において道通様がどのように広まっていったのかを、次頁の図10・図11と事例とともに考えてみる。

まずは清水家の本家のみで道通様が祀られるところから始まる。清水家は道通様を分家にも、非血族者にも御霊分けすることはなかった。

【沖元の事例①】

- ・清水家本家でのみ道通様を祀る。
- ・分家の笠岡市西大島の清水家「外側の神社はあるが、中身は空っぽ。沖元へ持っていった」
- ・沖田神社宮司「清水家が分家身御霊分けしたという話は聞いたことがない」

御霊分けをすることはなかったが、清水家本家の道通様は非血縁者の人々の間でも評判になっていたと思われる。沖田神社の宮司家には「清水家が道通様を沖田神社の境内社に加えてほしいと言ったのは、末永く道通様の信仰を続けるためと、清水家邸宅に道通様の話を聞きに来る人が多かったため」と伝わっているようだ。

しかし御霊分けはされないの、周辺の人々は自分の家に道通様の社を造るのではなく、清水家の道通様を信仰したと考えられる。

【沖元の事例②】

- ・沖田神社宮司「清水家が道通様を沖田神社の境内社に加えてほしいと言ったのは、清水家邸宅に

岡山県南部地域の道通信仰について

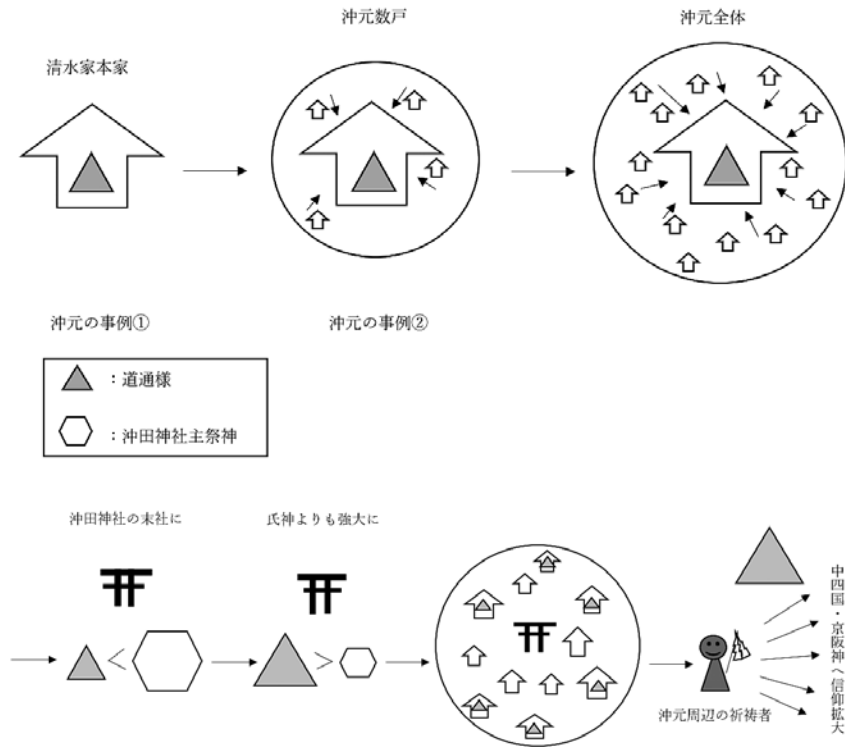


図10（上の図）、図11（下の図）、沖元の屋敷神的な道通様の拡大予想を平田が作図

道通様の話を聞きに来る人が多かったため
つまり、周囲の人々から信仰されることもあった。

この周囲の信仰域は、少数戸から沖元全体、少なくとも清水家の支配域であった沖新田の四番領には広がり、後に沖田神社の境内社に加わる。

境内社に加わった道通様は沖田神社の主祭神よりも深く信仰されることとなる。今の沖田神社宮司もそのように感じていると話していた。また先行研究でも以下のようなことが記されている。

道通様には氏子が存在しないそうです。沖田神社の氏子は大体道通様の信者であつた。(湯浅照弘 1959)⁽⁹⁾

これは1959年の頃の話だが、この頃には沖田神社の氏子と、道通宮の信者が同一視されており、沖新田では沖田神社の主祭神とその境内社の道通様は、ほぼ同格の扱いであった。加えて沖田神社

道通宮は、京阪神を中心に全国に信者がいる。境内社に加えられた道通様は、沖田神社の主祭神よりも強い信仰を得ていた。

【沖元の事例③】

- ・清水家が道通様を沖田神社の境内社に加わるように頼む。沖田神社がそれを承諾し、沖田神社道通宮が造られる。
- ・氏神である沖田神社の主祭神よりも、道通様への信仰が強くなる。

沖田神社宮司の認識によると、清水家は道通様を御霊分けすることはなく、清水家本家以外、非血縁者含む家々が道通様を屋敷神的に敷地内へ祀るようになったのは、道通宮が沖田神社境内に加わってからだとされる。沖田神社道通宮から道通様の御札をもらい、敷地内に建てたお宮や、瓦クド、屋内で祀るという形で現在は残っている。

【沖元の事例④】

・沖田神社道通宮から道通様の御札をもらい、家の敷地内のお宮や瓦クドで祀る。

繰り返しになるが、屋敷神が部落神や氏神と併存した際、もともとその屋敷神を持っていた家が、神社の祭事において重要な役割に就いたり、神社の由緒に家の名前が残ったりすることが多い。清水家は、沖田神社および沖田神社道通宮の祭事になにかしらの役割を持つことはなかったが、清水家は沖田神社道通宮の由緒に名前が現れるのでこの事例にあてはまる。

清水家の非血縁者が道通様を祀っている事例も残っている。

西大寺市坂本（旧上道郡雄神町）坂本には道通宮があります。勿論オツカイシメは蛇です。此処の道通宮は岡山市沖田の清水作夫氏と同様現在の民家の屋敷に祭ってある。僕が探訪したところでは巫女が二代続いてこの道通宮の祈禱家となっている。（湯浅照弘 1960）⁽⁹⁾

上記は沖田神社から6キロほど離れた土地で、屋敷神的な道通様が祀られていた例である。この家は清水家との関わりは一切記されていないので、非血縁者が道通信仰を屋敷神の形式で祀っているということになる。

祈禱師の影響によりその信仰圏をさらに拡大する過程である事例⑤は、沖元においては多くの事例を残している。以下はその一部である。

【沖元の事例⑤】

西大寺下之町のH氏は祈禱家として現存するものでは、私が調査した中では、最も盛大で農村の大衆又は西大寺市でも深い信仰を得ていた模様である。

（中略）

このH氏は道通様も稲荷様などと一緒に祀っていて、現在でも道通様の蛇のタヅリをなくする祈禱を行っている。沖田神社の道通宮にあるカラツ製の白蛇が祭ってあるそうです。（湯浅照弘 1960）⁽⁹⁾

上の事例では、沖元周辺の祈禱師が道通様を祀っている一方、道通様の祟りを祓う祈禱も行っている。道通信仰を広めると同時に、その祟りの恐怖も広めていたのである。

沖元、およびその周辺にはH氏のような宗教家が沢山いたようで、沖元の道通信仰を研究していた湯浅氏も10家以上の祈禱家達の元を訪れている。これは沖元の土地の性質に因るところだろう。

沖元は児島湾へ流れる川が作った干潟を利用して作られた大干拓地で、土地としてももともと不安定であったためか、水害が多く、土地も初めは「不毛地」と呼ばれるほど痩せていた。⁽²⁷⁾

こういった厳しい土地に救いを求めた大衆の悲痛な思いにこたえるように、宗教者達は沖元へ多く集まっていたのだろう。祈禱家が多く、それに救いを求める人々も多かったからこそ、救済の媒介とされた道通信仰は広く信仰された。

沖元で道通信仰が盛んに行われたのは、清水家の影響も勿論だが、その土地柄も要因の1つと考えられる。

岡山市沖元の道通信仰はまず清水家という有力一族の屋敷神から始まり、御霊分けすることなく信仰が続いた。しかし清水家は道通様への信仰を末永く守ることと、他家の人々が道通様を求めて清水家を訪れることが増えたことを理由に、氏神である沖田神社へ境内社として道通宮を加えてくれるよう頼む。氏神の境内社となった道通様はここで初めて御霊分けが行われるようになり、多くの家で屋敷神として祀られるようになる。そしてその信仰圏を京阪神にも伸ばした。この拡大には周辺の宗教者達の活躍もあるが、「道通様は祟る」という要素を根強く植え付けたのも、彼らの影響が大きい。

以上が、沖元地域における屋敷神的な道通信仰の拡大、分化についての考察である。

2、道通神社の考察

続いて笠岡市の道通神社について考えてみる。

沖元の沖田神社道通宮は清水家の屋敷神から始まったものである。笠岡市の道通神社についても、道通様の屋敷神的な面から考察しようとしたが、その考察では適切に笠岡の道通神社を捉えることができないと感じた。

笠岡市の道通神社と沖元の沖田神社道通宮は、

岡山県南部地域の道通信仰について

同じ「道通」という名前がついており、道通様とのお使いの蛇を信仰しているが、沖田神社道通宮が屋敷神をもとに始まった事例であるのに対して、笠岡市横島の道通神社はまた違った形の事例であると考ええる。

笠岡には、文献を探しても道通神社に聞き書き調査を行っても、神社に強い影響を与えた家の名前は見つからなかった。唯一道通信仰に関わる個人の家として見つけたのはT家だが、道通神社の由緒にはT家の名前は出てこず、道通神社の祭事にもT家は関わっていない。道通信仰に関わっているが、清水家のように信仰の基礎に関わるような立場ではなく、屋敷神として道通様を祀る家の1つ、といった立場である。

直江氏の提示した、屋敷神が氏神の神社と併存される例では、その氏神の神社の氏子圏で強く信仰された屋敷神がこの事例に当てはまる。直江氏の屋敷神の拡大、分化のパターンとは少し違ったが、沖元の沖田神社道通宮も、沖田神社の氏子圏の有力一族の屋敷神が境内社に加わった例である。しかし、笠岡の道通神社の氏子圏内、またその周囲にはそういった家は見つからなかった。

現在道通神社の宮司は、個人宅の道通様の社を仕舞うなど、屋敷神的な道通様に関わる儀式も行っているが、神社とその信仰に強く影響を与えたような特定の家の存在は見られない。

笠岡の道通神社の信仰の起源は、沖田神社道通宮の信仰の起源とは別の種類であると考ええる。

では笠岡の道通神社の起源はどういったものだったのか。私は道祖神だったのではないかと推測する。

道祖神とは、全国各地に見られる境の神の総称である。道祖神だけでなく、サエノカミ、岐神、衢神、猿田彦大神、幸神など、地域によって呼ばれ方が違う。いずれも同じ神であるとの前提で報告されることが多いので、その関係や分布は必ずしも明確ではない。『古事記』に登場する道返大神、塞坐黄泉戸大神などがサエノカミの古い姿とされ、『今昔物語集』で「道祖」という表記がみられ、サエノカミと訓じられた。村境や峠など、そこで生活する人たちにとっての境に祀られることが多い。また、境の神としてだけでなく、道の神、旅の神、防塞、除災、縁結び、夫婦和合などの神ともされている。東日本では小正月の火祭り

をこの神の祭りというところが多いが、全国的には特に定まった祭日を持たないとするところも多い。男女双体の神とされることも多く、男女が並んで刻まれた石碑や、性的なモチーフで表されることも多い。⁽²⁸⁾

國學院大学に所属する民俗学者の倉石忠彦氏は道祖神について深く研究している。

倉石氏によると、道祖神は天孫降臨譚に現れる猿田彦大神と同様の神だといわれることも多いそうだ。道祖神のご神体は石や木などで、自然の形そのままであったり、加工され、男性器を模した陽石、男女対に彫られた人形などで表されることもある。

境の神として期待されたのは、境の位置を確定することと、外来の災いをなす存在の侵入を遮る機能だった。しかし時代と社会の変化のなかで、空間を閉ざしているだけでは繁栄は望めないと、道を開き、人や物の行き来を助ける旅の神の機能が加わった。それは物を生み出す力を期待するものでもあるので、生産に必要な性的性格も手にする必要性が出てくる。よって男女の情愛を表す形を取るものも生まれた。

道祖神が男女対で祀られているものは豊穰性も期待される。しかし男性器のみのモチーフ、つまり単神で表されるときには、男性器は邪悪なものに対抗する攻撃的な存在、また漲る力の源という存在とみなされ、特に強い境の神としての機能を期待されていた。

以上、倉石氏の論文⁽²⁹⁾から今回の卒業研究に必要なと思われるところを中心にまとめたものになる。

これを笠岡の道通神社と照らし合わせてみる。

まず、道通神社の由緒に現れるご神体は石である。これは陽石であるという伝承も残っている。道通神社の宮司への聞き取り調査でも、現在も本殿にはご神体として石を祀っているといわれた。

石、特に陽石は道祖神の特徴でもある。陽石で祀られている場合は、強く境の神の機能を望まれ、災いに対する防御を願われた。

続いて概要に記した道通谷についても考える。この道通谷が位置した土地柄から、道通様は道祖神ではないかと考察した先人、広沢澄郎氏の論文の一部を抜き出す。

道通様が初めて笠岡（旧笠岡村）にあったこと、ここから勧請したことは、多くの伝説の語るところである。笠岡の

- ①伏越の道通谷
- ②伏越の笠神社（宮地八幡宮＝道通宮あり）
- ③古城山の東側、の三つの場所があげられている。

これらはいずれもすぐ近くであるが、伏越一帯は江戸時代、浜街道の中で大磯（磯）に続く難所であった。

海岸は通れず岩壁の上を歩いて行き詰った所から山越えを余儀なくした（地福寺住職談）また江戸中期から、ここは村境になった。そこで“旅人を守る”道祖神的なお宮がつけられたのだと思う。（広沢澄郎 1963）⁽³⁰⁾

以上が広沢氏の考察である。第1章の道通神社の概要に書いた由緒では、道通谷は大磯という地域にあるということだが、大磯は伏越のすぐ隣に位置するので、広沢氏のあげた道通谷の候補地とかなり近い距離にある。ほぼ同位置を示しているとみてよいだろう。

大磯と伏越はそれぞれ、長い荒磯の海岸が続くから大磯、伏すように通らねばならない山道があるから伏越、という名がついたと言われている。

次の地図は延享2年（1745年）頃の笠岡市を描いたものになる。

「八幡宮」⁽³²⁾、「地福寺」と書かれた辺りが大磯・伏越地域である。鳥居が2つ描かれた島は古城山で、これは埋立事業の前なので島だが、現在は陸続きになっている。

大磯・伏越辺りと古城山の間は海が隔てており、崖になっているだろうと見てとれる。

広沢氏の考えるように、このような険しい道には道の神としての道祖神を求められた可能性がある。また、村境でもあるので道祖神が祀られていてもおかしくはない土地柄である。

また、この道通谷と思われる地域の中には、T氏の邸宅もあった。

第一章のT家の屋敷神の概要にも記したように、T家に残る文書では1751年から1818年にはこの家の敷地内の神は道通神社ではなく猿田彦神社という名前の神社祀られていたとあるらしい。⁽¹⁵⁾

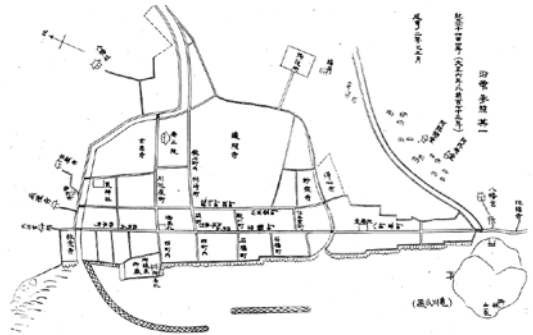


図12、一七四五年の笠岡（高田九郎編 1917）⁽³¹⁾

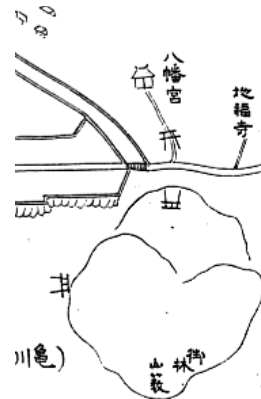


図13、図12の大磯・伏越周辺を切り抜いた



図14、笠神社から大磯・伏越方面を向いて撮った写真。右手に見えるのが古城山。この笠神社と古城山間の低い土地に道通谷があったと思われる（撮影：平田）

きちんと実物を確認できたわけではなく、その史料の正当性も考えねばならないが、この年代からすでにT家敷地内で猿田彦が祀られていたとすれば、沖元の清水家の道通様とは別物ということになる。清水家以外の家が屋敷神としての道通様を祀るようになったのは、沖田神社に道通宮ができた1800年以降と考えられるからである。

岡山県南部地域の道通信仰について

道通谷と思しき場所にある T 家が祀っていた猿田彦。私には、道祖神としての猿田彦の残滓のようにも感じる。

そして道通神社の由緒には道通信仰の特徴である、蛇や屋敷神的要素が見られない。人を崇めという点は道通信仰の道通様と一致はするが、これは道通信仰に限った話ではなく、神と崇りはセットで語られることが多いためとも考えられる。

以上の点から、道通神社の起源は現在に伝わるような道通信仰ではなく、道祖神から始まったと考察する。「崇り」「蛇」「屋敷神」という性質の道通信仰は後から加わった要素だ。道通谷に祀られている頃は道祖神として、その後孤島であった横島へ勧請されてからは横島の氏神となった。その後何らかの影響により、現在の道通信仰が重なった。

沖田神社道通宮は「屋敷神と氏神が併存され、屋敷神が氏神への信仰を上回るほどの信仰を得た事例」と言え、笠岡市横島の道通神社は「全く別の信仰をされていた神に、別の屋敷神的な信仰が加わり、強い信仰を得た事例」と言える。

3. まとめ

現在、沖元の沖田神社道通宮も笠岡の道通神社も、「蛇を使って他者を崇る神」「家の敷地内で祀る神」という共通の道通信仰で成り立っている。

しかし、沖元の沖田神社道通宮はもともと屋敷神の要素を持っていたが、笠岡の道通神社にはなかった。おそらく後の世で加わった要素だ。

屋敷神的な道通様の面に限定して考えるなら、まず沖田神社道通宮で先に屋敷神的な道通信仰が始まり、その後笠岡の道通神社でも行われるようになったのだろう。沖田神社道通宮は清水家の道通様が起源であり、その氏子圏において清水家は大きな権力を持っていた。屋敷神的な道通様がより広がりやすい土地は、笠岡よりも沖元である。

笠岡の道通神社は沖元の沖田神社道通宮を追って屋敷神的な道通信仰を行うようになったと考察したが、私は笠岡の道通神社が屋敷神の道通様を受け入れたからこそ、現在も信仰が残るほど道通信仰が拡大した、とも感じる。

そう考える理由の1つは、笠岡の道通神社が沖元の沖田神社道通宮と離れた場所にある、という点である。笠岡の道通神社の宮司は、今も広島県

福山市に道通様を家の敷地内に祀る家々があり、そこで信仰する人達は繰り返し神社へ参拝に来るのだと話していた。隣の県の福山市にまで屋敷神の道通様が広まったのは、岡山市よりも近い笠岡市に道通神社があることで、参拝もしやすく、また神社の宮司も赴いて世話をできる距離にあったからだろう。信仰を盛んに行う神社が離れた土地に分散していることで、物理的に信仰圏が広がった。

そしてもう1つ、笠岡の道通神社が熱心に屋敷神的な道通様の信仰を守っているという点である。こちらは私の主観によるところが大きくなってしまっているのだが、現在屋敷神的な道通様により関わっているのは沖元の沖田神社道通宮ではなく、笠岡の道通神社であると感じた。沖田神社の宮司に、各戸の道通様のお宮を仕舞うときにはどのようなことを行うのかと聞くと、それぞれの家の人がご神体としていた御札を沖田神社道通宮へ返しにくるだけ、との答えが返ってきた。同じ質問を笠岡の道通神社の宮司に尋ねると、宮司は直接その家に赴き、きちんと儀式をしてお宮を仕舞うのだと答えた。

この道通様の仕舞い方だけでなく、瓦クドの扱いかにも差があるように感じた。沖田神社道通宮のお岩場には、隅の方に固めるように瓦クドが積み重なっていた。沖田神社宮司によると、家に祀っていた道通様を返しに来た人が勝手に置いていくのだと話していた。対して笠岡の道通神社の瓦クドは、蛇の石像を囲むように並べられており、瓦クドの中には全て陶器製の白蛇が祀られており、管理が続いているようだった。

起源という意味では沖元の沖田神社道通宮の方が古いと思われるが、現在も積極的に屋敷の道通様の信仰を手助けする笠岡の道通神社の働きも、道通信仰に強い影響を与えていると考えられる。

おわりに

今回は屋敷神的な道通信仰に限定して考察を行った。これにより屋敷神としての道通様の拡大と、起源、そして現在の信仰について自分なりに理解を深めることができた。

しかし道通信仰は屋敷神の要素だけで成り立っているのではない。蛇を使役する神、他者を崇る激

しい神、憑き物として恐れられる神、といった面での考察をしなかった。それにより、沖元の沖田神社道通宮と笠岡の道通神社が、何故同じ道通信仰で成り立っているのかという疑問が残ってしまった。

沖元の沖田神社道通宮は清水家が信仰していた道通様が起源で、笠岡の道通神社は道祖神が起源ではないかと考えた。全く違う起源を持ち、離れた土地に建つ、特に交流のない2つの神社が何故同じ信仰をするようになったのだろうか。

この理由は今回考察しなかった蛇、憑き物、そして「道通」という名前そのものにあるのだろう。

例えば、岡山県の北部には以下のような「トウビョウ」という蛇の憑き物の伝承が残っている。

憑物の1つ。中国・四国地方でいわれる。トウビョウというのは小さな蛇の一種で、白蛇だとか首に黄色の輪があるとかいわれる。トウビョウを所有、飼育しているとされる家、家系、その家の人をトウビョウ持ちといい、結婚に際して忌避された。トウビョウ持ちはトウビョウを瓶や徳利に入れて台所の床下などに隠し、ときどき食べ物や酒・甘酒などをあたえてひそかに飼っているとされる。トウビョウ持ちは、トウビョウをよくまつていればその恩恵によって金持ちになるが、粗末にすると逆に崇られ、家は没落するともいわれる。(『日本民俗大辞典 下』2000「トウビョウ」欄)⁽³³⁾

トウビョウは道通様のお使いの蛇とよく似た性質を持つ。岡山に古来よりこのような蛇への信仰があったと考えれば、それが神と崇められた事例が道通様、憑き物として恐れられたのがトウビョウ、という考察もできる。また、岡山のこの古い蛇への信仰で、沖田神社道通宮と笠岡の道通神社は繋がっている、という仮説を立てることもできる。

また、「道通」という名前もどういった由来からなのかを解明できれば、より道通信仰について理解できるだろう。清水家の屋敷神的な道通様の視点で見ると、道通とは「道を開いて、一族を助けてくれた神」という意味を持つ。一方、笠岡の道通神社の前身が道祖神であったという今回の研究の仮定から考えると、道通は「道を通す神」と

いう道祖神にはぴったりの名ということになる。このどちらの意味にも取れる「道通」という名前こそ、別々の信仰を持っていた両神社に受け入れられたのであり、神社同士を繋ぐ1つの要因になったのではないか。

当たり前のことだが、屋敷神的な側面のみでは道通信仰は解明できない。心残りができるという結果になってしまったが、一見同じに見えた両神社を、屋敷神、道祖神の面で考察することで、2つの神社の違い、起源の考察ができたという点は、満足している

【注】

- (1) 「お使い」という意味。
- (2) 沖新田開墾三百年奉賛会記念史編集委員会『沖新田開墾三百年記念史』(1995) p24 より
- (3) 沖田地区連合町内会 (1975)『沖田村誌』 p234 より
- (4) 沖田神社 公式ホームページ <http://www.okita-shine.com/> より
- (5) 佐藤米司 (1960)「道通様補遺」岡山民俗学会 (1981)『岡山民俗 1』名著出版 p385 より
- (6) 湯浅照弘 (1959)「沖田神社の道通宮 (其の一) —入会の弁に代えて—」岡山民俗学会 (1981)『岡山民俗 1』名著出版 p371 ~ 376 より
- (7) 湯浅照弘 (1960)「岡山県南部地帯の祈禱家の存在 (其の一) —主として沖田新田地方に散在する祈禱家について—」岡山民俗学会 (1981)『岡山民俗 1』名著出版 p383 ~ 384 より
- (8) 湯浅照弘 (1960)「蛇神信仰調査研究での一私見」岡山民俗学会 (1981)『岡山民俗 1』名著出版 p403 ~ 405 より
- (9) 湯浅照弘 (1960)「岡山県南部地帯の祈禱家の存在 (其の二) —西大寺周辺に散在する祈禱家—」岡山民俗学会 (1981)『岡山民俗 1』名著出版 p415 ~ 416 より
- (10) 広沢澄郎編 (1985)『神島史誌』神島協議会

岡山県南部地域の道通信仰について

- p193 より
- (11) 岡山県神社庁 道通神社 <https://www.okayama-jinjacho.or.jp/search/18221/>
- (12) 三浦秀宥 (1977) 『岡山文庫 73 岡山の民間信仰』 日本文教出版 p76 より
- (13) 新成羽川ダム岡山民俗総合調査団編 (1966) 『新成羽川ダム水没地区の民俗』 岡山県教育委員会 p149 より
- (14) 佐藤米司 (1960) 「道通様について」 岡山民俗学会 (1981) 『岡山民俗 1』 名著出版 p401 ~ 403 より
- (15) 郷土史愛好グループ (1998) 『おや こんなところにこんなものが』 p37 より
- (16) 岡山県教育委員会 (1974) 『笠岡諸島の民俗 振興離島民俗資料緊急調査報告書 (I)』 p60 より
- (17) 「仕舞う」とは、家の敷地内の道通様の社を壊して片づけること。笠岡市横島の道通神社宮司は、儀式をして、その社でご神体になっている道通神社のお札を回収、その後社を潰すという一連の流れをまとめて「仕舞う」と表現した。
- (18) 「オガミヤ」とは祈祷師や占い師のこと。
- (19) 「わやくそ」とはめちゃくちゃという意味。
- (20) 直江廣治 (1966) 『屋敷神の研究 一日本信仰伝承論一』 吉川弘文館
- (21) (20) の書籍 p219 より
- (22) (20) の書籍 p230 より
- (23) (20) の書籍 p232 より
- (24) (20) の書籍 p232 より
- (25) (20) の書籍 p221 より
- (26) 「1959年9月25日の調査を指す」
- (27) 『沖田村誌』に載っている「岡山縣上道郡水害見取圖(明治二十五年)」に明記されている。
- (28) 林英夫『日本民俗大辞典 上』(1999) 吉川弘文館 p186 ~ 187 「どうそじん」欄 倉石忠彦 と 林英夫『日本民俗大辞典 下』(2000) 吉川弘文館 p683 「さえのかみ」欄 倉石忠彦を参考にした。
- (29) 倉石忠彦 (2001) 「都市と道祖神信仰」 (2003) 『国立歴史民俗博物館研究報告 103』 国立歴史民俗博物館 と 倉石忠彦 (2009) 「[道祖神] に見る伝承と創造」 (2009) 『信濃
- 第 61 卷 第 9 号』 信濃史学会を参考にした。
- (30) 広沢澄郎 (1963) 「信仰のなごり (笠岡)」 岡山民俗学会 (1982) 『岡山民俗 2』 名著出版 p17 ~ 19 より
- (31) 高田九郎編 『笠岡町誌』 (1917) 岡本文明堂 より
- (32) 「八幡宮」の正式名称は伏越八幡宮といい、現在の笠神社という名前になっている。
- (33) 林英夫『日本民俗大辞典 下』(2000) 吉川弘文館 p189 「トウビョウ」欄 板橋作美

その他 参考文献

- 佐々木勝 (1983) 『屋敷神の世界 一民俗信仰と祖霊一』 名著出版
- 平凡社編 (1988) 『日本歴史地名大系第三四巻 岡山県の地名』 平凡社
- 岡山神社庁 (1981) 『岡山県神社誌』
- 笠岡市 (1989) 『笠岡市史 第二巻』
- (2004) 『笠岡市史 地名編』